夢と祈禱師

鈴木清順

花をむしりとるようないたなさではなく、
嫋やかに人が殺せる、と思った。父が死んだ時に……

北冬書房

鈴木清順

夢と祈禱師

夢と祈禱師

著　者　鈴木清順
発行日　一九九一年七月二十八日

発行者　高野慎三
発行所　北冬書房
東京都目黒区大橋一の四の一〇
電　話（三四六一）六二八八

製本所　河上製本

定価はカバーに表示してあります。

ISBN4-89289-088-X C0074

目

次

I

あだ花……6
たった一人の戦争……16
流れ者……26
花を摘むのは女であり虫を殺すのは男である……39
物語・村木源次郎……44

II

幼稚な夢のなかから……70
わがナチ体験……77
フィルムは滅びてこそ……85
「けんかえれじい」を語る……91
滅亡的脱コマーシャル論……102
役　者……118

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

Ⅲ

生れたとしが大震災……138
大正エレジー……149
三流斎どん山……154
敗戦の日……175
九月は革命の月……184
上高地で拾った男……193
無用の用……201
あとがき……204

(グラフィック❖斎藤種魚)

I

あだ花

私は金木犀の咲いた小さな家にゆっくり歩いて行った。みんなは未だそこで酒を飲んでいがみ合ったり、不貞腐れたりしている筈だった。誰かが何かをしなければみんな駄目になって了うのは分かり切っていることだったが、一方で何かを必ずやる、という黙契が、無頼の生活の日一日を許し合っていた。誰もが気持が昂ぶると、俺がやる、と云ったが、気持が静まると長い沈黙が続き、かかえ込んでいる膝頭がぶるぶる小刻みにふるえた。誰もが深い恐怖に突きおとされているのは事実だった。やることは精神の錯乱でこと足りるが、そのあとの暗闇はまさぐるに千本の手があっても足りないことだった。境遇の激変には誰もが不慣れだった。誰もが一番先にことをやるのをためらったのも、未知の恐怖を克服することが出来なかったからであり、私とて同じことだっ

たが、その恐怖の渦に巻き込まれ足掻いているうち、私はやること自体の恐怖にどかんとぶち当たったのだ。無我夢中になる迄に私の心臓はどきどき早鐘を打つように鳴り、握っている短刀をおとしそうになったり、人差し指がふるえて私の意志とは全く違った時にピストルの引金が引かれるに違いない。みんなはことをやる時の恐怖は、自分の恐怖より相手が受ける恐怖の方が大きいから、それを考えれば何でもない、それよりもあとの恐怖の持ってゆき場処がとりも直さず自分自身以外にないから涙が出るのだ、酒、女、麻薬、それを忘れることが出来るものなら何でも手に入れ度いが、ことをなしたあとそれらを手にすることは先ず絶望的だ、僅かに英雄的行為の自慰があるだけだが、それとても長い幽閉の孤独には克てないだろう、そして最後にやって来るのがあの恐怖だ、と半分泣きっ面でいうが、あとのことが解決出来たら人は人を殺すことが出来るものなのだろうか。

私にはとてもそんな自信はなかった。

然しみんなが決めた以上そのことはやらなければならないことだった。

むかしはこんな筈ではなかった、と古顔の仲間が云ったことがある。みんなの意気地のなさを嘲ったのか、小さな家の目的が違うところにあったのか判然としなかったが、私が郵便局をやめて小さな家に転がり込んだ時には、それは既定の事実として、獲物の名が具体的に酒の肴としてのぼり、酔いにまかせた計画が傍若に語られた。あとさきのことはふりかえる余裕もなく、行為

そのものの悲愴に酔いしれた。然し一度二度計画の初歩が崩れると、あとさきのことが湧き水のように冷たくみんなの心を浸し始めた。計画資金として苦労して集める金も酒や女に浪費された。挙句みんなはつかみ合い殴り合い血を流した。古顔の仲間はなだめすかしあきらめて窓の外の金木犀に眼をやった。北向きの陽のささないところにその木はあったが、尚悪いことにみんなの出入りする度に戸が木肌をこすり、細い枝とかさかさの葉が赤黄色の小さな花を咲かせるまでもなく立ち枯れてゆく有様は、みんなが身勝手に咲かせる死に花のあざとさを皮肉に嗤っているようにも見える。そうかと云って小さな家の東西南北陽の充分射すところもなく、私は朝陽がやっとさす東の隅に、みんなの口論からのがれるように移し植えてやったのが三年前のことで、花の咲くのも咲かないのも木の寿命と心得て、それでも心の何処かには、この花の咲くことと自分自身の花の咲くことをからみ合わせて思い続けていた。

小さな家の濁った空気に爽やかな香りが吹き込んで来たのは去年の秋である。私は下駄をつっかけ東の隅に飛んで行った。花は私の手の届く高さに三つ、濃いドリアンの色を日蔭葉にうめて咲いていた。感動的な可愛さに私は花に賭けた自分自身を忘れて立ち尽くし、花の匂は色よりも厚い陽炎の層をつくり流れ、乱れた跫音がしたかと思うと、みんなが重いまぶたを見開いて花をさがしていた。みんなの眼が何年ぶりか一つの花に集まっている。小さな家にいながらみんながてんでの方向に自棄と疑いと暗い希望を苦いものを吐き棄てるように吐き出し、どんより見つめ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ていたとりとめのない姿はなかった。黄色く疲れ果てた眼は変えようがなかったが、少し許り口をあけて呆気にとられて見つめるみんなの顔に精神の緊張が見られた。

咲いた花から身を退けると、私もようやく花に賭けた私の未来の輝きを見つめた。勿論それは、仮えば金木犀が北向きの土地から、僅かに陽の射す東の隅に植えかえられたような些細な環境の変化をのぞんだに過ぎない。誰かが私の環境を変えてくれる。誰か、がだ。私自身が変えるとすれば、私が小さな家からみんなの侮蔑と嘲笑を受けて脱落者になり逃げるか、白熱の太陽が砂埃の道に色を失う時、私の身体と被害者の身体が一つになって転がる英雄的な瞬間か、そのどちらかであるが、私の勇気はどちらを選ぶことなく萎えて了うのである。然しその日から私は何をするという気もなく、腹に短刀をしのばせて出歩くようになった。

あの時私は人が殺せる、と感じた。花をむしりとるようないぎたなさではなく、嫋やかに人が殺せる、と思った。

金木犀が私に告げた環境の変化は、小さな家の内からではなく外からやって来た。これがそうであるか、と思うと、私が小さな家に飛び込んだ動機に比べ、いささか拍子抜けの気味がなくはないが、私自身に関係あることは確かである。

金木犀が未だかすかな色と香を残している頃、仲間と一緒に金策に出掛けた先で巡査に追いかけられ、逃げ込んだ露地と目と鼻の先に私の実家があった。家の前に荷車が一台、それに莫蓙が敷かれ、妹が蒲団を家から抱え込んで出て来た。母に寄りかかるように敷居をまたぐ父を見て私は吃驚した。草角力の関脇を張ったことのある父が、無残という程に痩せ細り、這いつくばるように荷車に乗ると、母が楫棒をあげた。荷車は露地の敷石に奇妙に高いきしみをあげて動き出した。父と母と妹と、私は見てはならぬものを見し了った。名状し難いつらさが胸を突き上げ、私は親指を噛んだ。父と母が祖先から引きずって来たものを私が引き継ぎ、あのことをすることによって大きな重石をつけて私は父と母にそれを返そうとしているのだ。あのことをするはねっ返りの苛酷さを果して父と母は引きずって行けるだろうか。そのような逡巡は小さな家の誰にもあったが、一応は眼をつぶってことをなそうと云うのだ。不幸、貧乏、とるに足らぬ血ときめつけ、抹殺さるべき存在としてあきらめたのだ。今更不孝者よ、お許しを、と泣き叫ぶのを止めたのだ。身内を他人と見限ったのだ。

家を見たとき私は引きかえすべきだった。それをなし得ず、父と母と妹を見、今、荷車を牽く私の魂を人は善魔と呼ぶだろうか。

済まないね、有難うよ、張りを失った声で父がいう。私は黙って荷車の速度を早める。これ以上親と子の情愛をもつれさせてはならない。内臓が腐って崩れてゆくよ、もう駄目だね、ガンだ

から。お前のおじいさんもガンだった、気をつけるんだね。おじいさんが死んだ時、お父さんは三つだった。死んでも死に切れなかったろうな。そこへゆくとお父さんは安心だ、K子も十七だからな。

葡萄状菌が柔らかい赤紫色の球型なら、ガン細胞は硬質の黒曜石のような光を持つ雲母だろう。内臓は汚物にも似たきたならしさを見せるが、顕微鏡に映る菌や細胞は、地球がダイヤモンドやエメラルドを内臓するように、人間が作り出す宝石に違いない。

人間はその宝石を作るために六十年も七十年も生き、鋭角的な宝石の切っ先に内臓をずたずたに切り裂かれ、苦しみもがいて死ぬのだ。父の苦悶を私は果して正視することが出来るだろうか。私は人を殺すことが出来ず、野犬をピストルで射ち殺した高見順のテロリストの心象を鮮かにとらえた。彼は野犬の死の苦痛を最後まで見届ける勇気を自分に課したのだ。私が人を殺すことが出来ないのは、相手の苦痛を自分のものとして了うからだ。若し死が苦痛でないなら、私も既に人を殺している。それが証拠に、目も絢に咲きほこるさくら花を人はいとも簡単に手折るではないか。花は散り際の苦痛を知らないから。然し父は花ではない。野犬だ。父の苦悶が重たく私にのしかかり、悶絶という言葉が、父の眼、口、手、指、爪にさまざまな形を与えて私の息の根を止めた。乾いた車の音がはたと止んで、私は黄土色の病院の前に立ちすくんだ。

立派なお葬式はたくさんの鳩を出棺と同時に飛ばすものなんだよ、死者の魂は鳩に乗って遠くへ飛んで行くんだ、そういうお葬式をお父さんはずい分見て来た。魂魄此処にとどまりて、って云う訳にはいかないんだな。立派なお葬式を出すぐらいな人はうらみなんか残さないよ。うらまれるってことはあるだろう。そうしたら鳩は飛ばないよ。そういうものか、この花は誰が持って来たの。お隣さんが昨日見舞に来ておいてった。花は素通りかい。そうだな。なぐさめにはならないんだな。一日中花を見ていてあきないって訳にはゆかないよ。痛みが来れば目をつぶって了うからな。苦しくはないのかい。いつも胸がむかむかしてな、出るものが出ない苦しさがずっと続いていた、指でほじくり出したよ、うさぎの糞みたいな黒い奴が二つ出て来た。腹を裂いてとり出し度いぐらいの苦しさだった。手術をすると医者が云ってた。やだな。どうして。痛いんだろう。知らぬうちに終わって了うってさ。痛みは自分持だからな。手術が出来るのはまだいい方だって……何だいそれ。八ツ手ってそんな小さいのかい。干したからちぢまったんだ、よく見て見な、葉っぱが十あるだろう、そいつを枕の下においておくと長患いしないんだ。こなどなにな っちゃったな。お母さんが又探しに行ってる。何処に。何処だろうな、東京中ぐるぐるまわってるだろう。

手足をベッドにくくられて、その患者は白眼をむいて大声を発していた。看護婦があわただし

く出入りし、医者が注射器を抛り棄てるように次々に注射をうっている。私を身内と間違えて、連絡する処には連絡した方がいいですよ、と医者は云った。奥のベッドで父がじっと患者を見ていた。

間もなく父は小康を得て退院した。

その頃重傷の小さな家に、関西からNという浅黒い頑丈な男がやって来て、またたく間にみんなを牛耳って了った。何かが起こる気配がした。Nの提示した具体案に沿って、Nと古顔の仲間が小さな家を出て行った時、みんな興奮した。次の計画の資金集めに真剣になった。が、一週間もしないうちにNが独り帰って来て云った、酒はないか。云い方が高飛車だった。みんなは又元のみんなになって了った。金木犀はとうとう咲かなかったのだ。あれは私の見た夢だったのだ。父の死の苦悶だけが現実のこととして私を緊めつけた。

大丈夫だから、と云うので荷車は止めにして電車で父を病院に送った。向いの席に腰をおろした父は、痩せて疲れてはいるが頬には赤味がさして此の前の時の入院の時に比べて元気そうに見えた。絶えず窓外を見ていた父は、突然立ち上がり、未だ時間はあるだろう、と云って電車を降り、停留場脇の牛肉屋にとことこ入って行った。すき焼を注文すると物も云わず餓えた人のようにガツガツ喰べる。ああ駄目だ、私はそう思い乍ら母を見た。何よお父さん、昨日まで胸がつか

えるの背中が痛いのって何も喰べなかったくせに、母が幾分はしゃぎ気味に云うのに、ギロッとした眼でにらむと、未だ喰べ残している私と母を置き去りにさっさっ出てゆこうとする。

先を急ぐということが、これ程悲しく私に映ったことは嘗てなかった。まだ今日、明日ってことはありませんから、という医者に、一日でも父の生命を先に伸ばして貰おうとする私の気持は、肉親の情という納得づくめの情愛の外に、死の苦悶の立合いを懼れたからに外ならないだろう。

その時私は人が殺せる、と感じた。花をむしりとるようないぎたなさではなく、嫋やかに人が殺せる、と思った。父が死んだ時に……

父が入院した翌日、私はNの指図に従い或要人を尾行し、足を棒にして母の家によると、父は同室の患者のお裾分けのくず餅をぺろりたいらげる程元気で、家にいた時は今にも死にそうなことを云ってさんざ手古ずらしたのに現金なものだよ、と融通のきかない父、金儲けの下手な父、頑固な父の悪口をさんざ云っていると、お隣さんが病院からの電話をとりついで来た。

白いカーテンで仕切ったマッチ箱のような狭い場処で、骸骨のような干からびた胸をはだけた父に、医者が人工呼吸をしていた。手と足に数本の針が突っ立っていた。父は首を横に眼をつむったまま、かすかに鼾のような呼吸をしていた。医者が看護婦に何か云うと、周章てた看護婦が

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com